

七月のテーマ
喜働



え・小島サエキチ

生きることは 働くこと

昨

年の冬、Mさんの妻がインフルエンザで数日間寝込んでしまいました。Mさんは、妻の代わりに、幼稚園と小学校に通う三人の子供たちのため、すべての家事をこなすことになりました。

早朝に起き出し、朝食と弁当の準備、家に帰って掃除、夕食の準備と後片付け、寝る前に洗濯、学校からの連絡処理…。

要領を得ないMさんの家事は「悲惨」の一語に尽きたといえます。しかし、この家事体験から学んだこともありました。

第一に、仕事の工夫についてです。洗濯一つとっても、シワになりにくい洗い方、乾きやすい干し方、タンスから取り出しやすい畳み方、効率の良い手順があることを妻から教わり、職場での自分の仕事ぶりを反省しました。

第二に、働きの意義についてです。普通、働けば報酬が与えられるものですが、家事には金銭的な報酬はありません。しかし、これが必要ならば、子供の生活もMさんの職場生活も成り立たなくなりま

す。報酬を得られないけれども、尊い働きが世の中にはあることを改めて実感したのです。

回復した妻に、Mさんが感謝と労いの声をかけると、意外な言葉が返ってきました。それは、「寝ているだけで何もすることのない方が辛い」というものでした。

倫理法人会の基本テキストである『万人幸福の栞』第十条には、次のような、いささか強い指摘があります。

職を止めると、間もなく死んでしまふ人の多いのは、仕事がなくないと同時に、気がぬけてしまうからである。

仕事の第一線から退き、退職をした後に必要なことは、「キョウヨウ」と「キョウイク」だといわれます。「教養」「教育」という漢字を当てはめてしまいましたが、これは、生涯学が大切さを指したものでなく、「今日、用」がある、「今日、行く」所があるということとを意味するそうです。

〈今日一日、何の用事もなく、行くあてもない〉…このことが人に

とつてたまらなく寂しいことであるのなら、また、どんな些細なことでもやることがあって、〈誰かの、何かの役に立ちたい〉という思いが人の自然な情だとしたら、先の語呂合わせも笑いごとでは済まされない重みを持つでしょう。

それは、人間にとって「働く」ということが、日々の糧を得るためであると同時に、自分の存在の証でもあるからです。

つまり、総じて利他的な営みである働きには、相手のためである以上に、自分自身の「生」を支えているということですから、喜びがないはずがありません。だから、「働いている時」が、ほんとうに生きている時なのです。

金銭の報酬はなくとも、家族のために働く家事も立派な仕事。Mさんの妻の生きがいもそこにあるのでしよう。

一日の働きの第一歩は、朝の起き方にほかなりません。目覚めると、思わず笑みがこぼれ、ワクワクするような、そんな生き方を目指したいものです。